わたしの戦争体験

福岡市博多区　　松尾　覚

入隊から帰国まで７年半、色々と思い出は多い。私は昭和１４年独立山砲兵で(旧)満州国双城堡に入隊。同年９月華中に渡りカン湘作戦に参加、激戦中夜間歩哨に立たされた。分哨長は「危ないから身を低くして監視しろ」と注意した。立哨位置は小高い丘で小銃弾や曳航弾が飛び交い危険を感じた私は、腹這いになって監視しているうちに連日の疲れからか眠ってしまった。そこに分哨長が巡察将校を案内し、私が眠っているのに気付き、暗夜を幸いに、私に小石を投げて目を覚まさせ、事無きを得た。戦場で歩哨が眠れば死刑だと分哨長から歩哨交代後にひどく叱られた。

昭和１６年、長沙作戦では春華山の戦いで、私と並んで前進中の山口上等兵（長崎県島原）が、１発の敵弾に心臓を射抜かれ即死した。分隊長の私は数人で敵弾の来る中を無我夢中で、一応安全な場所まで引き摺って行き、甲斐伍長（僧・佐賀県）によって葬儀を終え、片腕を切り取って遺体は埋葬した。私は片腕を布で巻きいつも肩に掛けて戦闘に参加した。１０日も過ぎた頃は悪臭がひどくなりやっと暇を見て焼いた。心臓を貫通した弾が背嚢に残っていたので遺骨と一緒に遺族へ送った。

昭和１７年、第２次バターアン半島戦では、ルソン島リンガエン湾上陸後、ディナルピアンを経てバターアン半島へ到着し、ジャングルの山坂を苦労し陣地に着いたが、毎晩夜襲が続き糸曹少尉は戦死するなど、今後の激戦を想像した。我々は６５旅団に配属されたが、同旅団は第１次では占領できず、第２次で絶対占領を期してか、我が中隊だけでも約２０００発の砲弾を準備させられた。射撃開始は４月３日午前９時となった。双方からの砲撃戦は物凄く、敵味方の砲弾飛び交い、敵弾身辺至るところで炸裂し、砲音は山や谷にこだまし、阿修羅の如く砲煙と砂塵で辺りは暗くなるほどであった。そうした砲撃戦は数時間続き、私の分隊だけでも約４００発を発射した。樹上の中隊観測所は敵弾で傾き、私の砲車は一部破損し、ある砲主は直接弾で吹っ飛び姿が消えたり、中隊でも多くの死傷者を出したが、４月９日占領した。

また、同年６月マニラ湾を出航(旧)満州国開原に駐屯した。そこで下士官候補者の教育に従事したが、１８年２月牡丹江第５部隊（部隊長山下大将）参謀部へ転属した。

２０年８月９日、ソ連軍が満州国境を侵襲するや司令部は敦化へ移動し、そこで終戦となった。だが、終戦を知らず満州国内至る所で今なお戦っているとか、ある部隊は生きて捕虜になるよりと全員自決したとか、相当数の部隊が兵器や爆薬を持ったまま「いつかは、日本のために戦う」と言って朝鮮方面へ移動したとか、いろんな話があった。

司令部では軍人の家族や軍族を内地へ帰還させるため、各部ごとに責任者が命ぜられた。参謀部は将校１名下士官３名（私も含む）兵５名で、櫻井参謀長閣下の家族をはじめ老人や子供それに女子軍族等約５０名であった。

私は司令部を離れ家族等のいる宿舎へ行った。そこにもソ連兵が来ては金品等を強奪するなど困ったとのことであった。私は冬の準備に、毛布を司令部に取りに戻った。既に、ソ連兵２人が門番をしていた。私はしまったと思ったが引き返すこともできず門内へ入った。毛布を３～４枚持って出ようとすると、門番は何か言葉を荒立て銃先で痛いほど突き押し戻そうとした。ここで捕まっては大変と家族護送証明書を見せた。だが字が読めず、これを上官へ見せろと手真似をしても通じない。ただ何か言いながら押し戻そうとするばかりである。私は逃げることもできず、毛布を取りに来たことを悔やんだ。そこで私は門番の前で、地面に寝て毛布を頭から被りぶるぶると震えて見せ、「これを病人に掛けるのだ通せ」と何回も同じ動作を繰り返して見せた。門番は何か話していたがしばらくして、通れと言う仕草をした。私は虎口をのがれるおもいで後も見ずに急いで立ち去った。

それから数日後、ソ連兵から全員移動を命ぜられ、敦化飛行場に集結した。別の班では、あまり急にソ連兵に追い立てられて、乳飲み子を置いたまま飛び出し、連れに戻ることも許されなかったと聞いたことがあった。私達は飛行場で夜明けとともに徒歩で帰国の一途についた。途中カンソウ溝と言う集落に着いたが、我々を迎える住民の目は冷たかった。ここで当分生活をするとのことで、食糧の高粱と、馬鈴薯は畑付きで買い入れた。しかし、数日後移動することになり、食糧等運搬のため荷車を買ったが、出発の朝には馬鈴薯も荷車も消えていた。でも、住民の態度から考えて調査はできず残念であった。吉林へ移動してからは、コンクリートの空き家住まいで冬の生活は耐え難く寒かった。ソ連兵は昼夜の区別なく来ては、金品の強奪や若い女子を連れて去ろうとした。我々男子は、ソ連兵から銃で突かれたり叩かれたり威嚇射撃をされるなどひどい仕打ちを受けながらも、その都度抵抗した。また、八路軍は、元日本兵を拉致しているとの噂もあった。何としても食糧を得ることが先決で、男子は、手足に包帯を巻き負傷を装い危険をおかしながらも現金収入に努め、女子は丸坊主姿となって巻き煙草を作り、市内を売り歩いた。途中売上代金を取られたり、悪戯され泣いて帰ったことも度々あったが、それでもよく頑張った。栄養失調は出るし、冬は寒さに、春はシラミに悩まされた。果たして日本へ帰れる日がくるのか、毎日が苦労と不安の連続であった。が、何としても日本の土を踏むまではと、一致団結し吉林での生活を何とか乗り切った。また、新京郊外に移動してからは治安は良かったが、苦しい難民生活に変りはなかった。

昭和２１年７月末、やっと葫蘆島から帰国船に乗ることができ、１年間の苦労も忘れて喜び合った。しかし、私には手放しで喜ぶことはできなかった。私が５部隊へ転属後、連隊の主力はサイパン島で玉砕した。私も転属が無ければ当然運命を共にしているはずである。私だけが生きて帰国するのは、今は亡き多くの知人戦友に対し、誠に申し訳ない気持ちで一杯であった。思えば初年兵の時ハルピン病院に入院し、退院後、華中へ渡り葛店鎮で下士候の教育があったが、入院中に勉強したのが幸いしてか首位で卒業できた。この時の成績が５部隊転属となり、今日があるものとむしろ入院した事に感謝した。

あれから５０年、山砲を分解駄載して戦地の山野を駆け回ったのも、総てが今となっては夢

幻となった。数年間戦場生活をし、想い出は尽きないが、戦場の惨めさは筆ではとうてい表わせない。家は焼かれ、家畜は略奪され、さらには逃げまどう住民、死体に取りすがって泣く子供、放置された息絶えだえの負傷兵や死体、あるいは、担架で運ばれる痛ましい日本兵の姿、いやというほど見てきた。戦争の悲惨さ惨酷さは体験者でないと理解できないかもしれないが、勝っても負けてもその被害や犠牲は余りにも大である。

戦後５０年を節目に、国民一人ひとりが当時を想い、再び戦争のない平和な世界建設に努力されるよう切に望むものである。